兜割源三郎

かぶとわりげんざぶろう

玄冶店密命始末

げんやだなみつめいしまつ

好村兼一

Kenichi Yoshimura

講

講談社文庫

兜割源三郎

玄冶店密命始末

好村兼一

講談社

|著者|好村兼一　1949年東京生まれ。東京大学在学中に全日本剣道連盟派遣学生指導員としてフランスに渡り、以後フランスで剣道指導に携わる。パリ在住。剣道は最高段位の八段。2007年に『侍の翼』で小説家デビューを果たす。主な著書に『青江の太刀』『行くのか武蔵』『神楽坂の仇討ち』などがある。

兜割源三郎(かぶとわりげんざぶろう)　玄冶店密命始末(げんやだなみつめいしまつ)

好村兼一(よしむらけんいち)

© Kenichi Yoshimura 2014

講談社文庫
定価はカバーに表示してあります

2014年11月14日第1刷発行

発行者――鈴木　哲
発行所――株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話　出版部（03）5395-3510
　　　販売部（03）5395-5817
　　　業務部（03）5395-3615

デザイン―菊地信義
本文データ制作―講談社デジタル製作部
印刷―――豊国印刷株式会社
製本―――株式会社若林製本工場

Printed in Japan

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277980-7

目次

第一章　玄治店(げんやだな)　7
第二章　夜狐(よぎつね)おらん　61
第三章　跛(あしなえ)の武芸者　108
第四章　鍋島の皿　162
第五章　年越しの客人　214
解説　細谷正充　267

講談社文庫

兜割源三郎

玄冶店密命始末

好村兼一

講談社

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

目次

第一章　玄冶店（げんやだな）　7
第二章　夜狐（よぎつね）おらん　61
第三章　跛（あしなえ）の武芸者　108
第四章　鍋島の皿　162
第五章　年越しの客人　214
解説　細谷正充　267

兜割（かぶとわり）源三郎（げんざぶろう）　玄冶店（げんやだな）密命始末

第一章　玄治店(げんやだな)

一

「まあまあ、そう目くじら立てなさんな、おさむらい」

振り返りざま、源三郎(げんざぶろう)は片手を前にかざして相手をなだめにかかった。

「鞘当(さやあ)てしおって、このままに済まされるものか！」

息巻く侍は地方藩士であろう。源三郎に劣らぬ立派な体格で、同年配の三十がらみ。酒が入った桜色の顔が見る見る赤みを強めていく。

「丁重に慮外(りょがい)の程を詫びればよし、さもなくば」

まなじりを吊り上げて左手を腰の太刀の鍔元(つばもと)へ送った。

「いいや、謝るわけにゃいかねえな。当てたのはおめえさんの方だぜ。理不尽は受け容れられねえのがおれの性分(しょうぶん)だ」

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

「なにいっ！」
ぶつかったのは、侍が千鳥足で、すれ違いによろけたためである。
「こちらっからおめえさんに詫びろなどとは言わねえわさ。お互いこのまま何もなしで別れようじゃねえか」
「素浪人の分際でいっぱしの口を利きおって。無礼打ちにしてくれる」
大刀を抜き放つや、切先をずいと源三郎の顔面へ突きつけた。
「聞き分けのねえ酔っぱらいだなあ」
源三郎は大きく身を引いたが少しも怯んではいない。素早く前後を見渡した。
「ちぇっ、つまんねえところへ通りがかったもんだ」
そこは両側に築地塀が続くひっそりとした小道で、西の雲間から冬陽が寒々とした残光を投げかけている。往来があったならば侍は抜刀を控えたであろうに。
「仕方ねえ」
源三郎は己の腰のものをゆるりと抜き合わせる。
「む？　なんじゃ、それは」
侍の仁王と見紛う怒り顔に、俄かに不審の色が湧いた。
源三郎が手にしているのは刀にあらず、鉄の棒。柄も鞘も、外見の拵えは刀と全く同じだが、中身は刀の定寸よりやや短めの角長鉄棒である。

「おめえさん、兜割を見たことねえのかい」
「兜割だと？　下司の兵具を腰にするとは呆れたやつ。そなたは武士の魂さえ売り渡した恥知らずか。いよいよ勘弁ならぬ」
侍は刀を諸手に取り直して肩口へ振り被った。
「懲らしめの一刀、受けてみよ！」
「おっと……」
繰り出された袈裟斬りを、源三郎は体を開いて難なくかわす。
「足元が覚束ねえ割にゃあ、いい太刀筋じゃねえか、おさむらい。いっぱしに剣術稽古しているようだな」
「黙れ！」
侍は返す刀で横薙ぎの一閃。
「そう来るかい」
源三郎は退きながら兜割を下方から思い切り振り上げた……鈍い激突音と共に侍の刀先は高々と弾かれた。
「無駄なこたあ、やめときなよ」
「く、くそっ！」
侍は酔いがすっかり覚めたか、遮二無二刀を振り回し始めたが源三郎は余裕綽々。

方向を変えられた。

うるさい蠅を追い払うかの如くに片手で兜割を操っている。侍の斬り込みは悉く

「ほれっ……ほれっ……」

「さて、終りとしようか。それっ！」

源三郎は諸手に握り直した兜割を渾身、侍の刀の平を目がけて打ち込んだ。

鉄鍋が潰れでもしたような重々しい音が響いて、次の瞬間、侍は我が目を疑った。

「ああっ？」

手に握る刀が『く』の字にひん曲がっている。

「どうせ安刀だろう、買い替えるんだな。それとも鍛冶屋に直させるかい」

「む、むむ！」

侍は刀の無惨な有様に目を据えて顔面蒼白である。

つい向こうの辻角に人影が現れ、こちらへ向かって来た。

「行くがいいさ。誰かに見られちゃばつが悪かろう」

「お、覚えておれ！」

源三郎へ憎々しげに一瞥を投げると、手に『く』の字を提げたまま、あたふたと逃げ出した。

「恨みっこなしだぞ。おれは逃げも隠れもしねえ。玄治店に住まう源三郎ってもん

だ」

声は侍に届いたのかどうか。後姿はたちまち見えなくなった。

「まあいいや、おかげで冷えた身体がいくらか温まった。さあ、帰って酒飲むぞ」

安永七年（一七七八年）、冬の訪れの早い年であった。

「風が冷てえなあ。寒い、寒い」

両手を懐にしまい込み、固く背を丸めて玄冶店へと足を急かせる兜割源三郎。まるで大きな達磨が転がり進んでいるようだ。

兜割は不思議な武器である。

入念に鍛え上げられた角長鉄棒で、柄元から短い鉤が枝分かれし、奉行所役人の捕物十手に似た形状をしている。刀と同様に浅く反りがついて棒先は鏨のように尖っており、鞘に納まっているので、腰に帯びれば見かけは刀と区別がつかない。刃部の縦割り断面が、先端鋭利な細い楔形を成すのが刀なら、兜割の断面は方形で、棟幅は刀と比べて倍以上に厚く、底辺側も棟よりやや狭い程度の幅広である。刀の刀身を上下から押し潰して棒状にしたのが兜割、とでも思えばよいだろう。

兜割は刀のように切れはしないが堅牢無比で、刀と激しく打ち合わせれば、刀は折れ飛ぶか曲がるか刃が毀れるかして役立たずとなる。そしてまた、斬り込みを受け止

めた時に、敵刃が兜割の刃部を流れ滑って柄元の枝鉤にはまり込んだならしめたもの。瞬時の繰り付けで押さえ込み、刀を使用不能にすることができる。

兜割に反りがついているのは打ち込みで敵に与える衝撃を和らげるためだが、代りに、もしも反りを裏返して棟側を下にして渾身振り下ろしたならば、先端にかかる激力たるや凄まじい。尖った一点に全力が凝集するのだから、まさしく鉄兜をも穿つ「兜割」となる。

命を奪わず、かなう限りに流血を留めて敵を制圧する……兜割はこうした生け捕り目的で工夫された武器に違いない。起源は定かではなく、戦国の頃であろうと推測される。

およそ兜割は脇差程の長さで片手使いが通常だが、源三郎は刃部二尺一寸、柄七寸の、長くずしりと重い諸手使いの兜割を愛用している。尤も、身の丈五尺八寸で筋骨逞しい源三郎だけに、扱いは諸手でも片手でも自在であるが。

源三郎が常時大刀の代りに兜割を腰に帯びるようになったのは、ここ十年ばかりのことだ。

源三郎の姓は疋田。疋田は元、直参旗本家禄三百五十石の家で、昔は一家揃って神田昌平橋南側、淡路坂の拝領屋敷に住まっていた。幼い頃から腕っ節が強かった源三

郎は、十歳を過ぎて、屋敷に程近い下谷練塀小路にある一刀流中西道場に入門した。中西道場は幅三間に奥行き六間の広い板敷を有し、師範中西忠蔵子武の下、数多の剣客がひしめく名実共に天下一の大道場で、源三郎に恰好の稽古場であった。

鉄面と竹具足とに身を固めて竹刀で打ち合う韜袍稽古が面白い。当初は痣や瘤が絶えない源三郎の毎日であったが、精進の甲斐あって、十五、六歳になる頃には、はや古参の年輩門弟達に劣らぬ腕前となった。

「源三郎、そなた、切り込んだとでも思うたか。それでは、ただ叩いただけぞ」

「かような刃筋の立たぬ竹刀扱いで相手を切れるものではない。学び直せ」

兄弟子達は打たれた悔しさに、何かと言いがかりをつける。

「お言葉ながら、打ち込みが強ければ、たとえ刀の平であっても敵に損傷を与えましょう」

「なにい。若輩の分際で古参の我らに口答えとは赦し難い」

「増長を叩き直してくれようぞ」

師範不在の隙を見計らって、数人がかりで源三郎を板敷に引き倒し、竹刀を梃子にして喉元を締め上げ、具足外れを打擲に及ぶ。

折檻目的の荒稽古は、却って源三郎を心身頑強な遣い手に鍛え上げた。二年ばかりを耐え抜いたおかげで、兄弟子達の手に負えない域に達したのである。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com